

# 春のシイタケ栽培管理上の問題と対策

## 一 はじめに

シイタケの収穫や植菌などは主に春行いますが、稲作や畑作などと兼業している場合、シイタケ関係の作業は収穫を除いて後回しにされがちです。

しかし、効率的に品質の良いシイタケを生産し販売するため、シイタケ関係の作業においても適期適作業が必要です。

今回は、植菌時期の遅れ、仮伏せ期間、ホダ場での乾燥防止、集中発生時の処理、乾燥機の収容能力超過とその対策について述べますので、業務の参考としてみてください。

## 二 植菌時期の遅れ

露地栽培での植菌は、九州や静岡県などの古くからの生産地では「梅の咲く頃から桜の咲く頃まで」と言われています。しかし、本県の場合は梅と桜がほぼ同時に開花することが殆どであるため植菌時期の目安とするには非常に困難です。

通常は、冬期間にハウス内で実施するか、露地では雪どけ後から桜の咲く頃まで行うことが適当と思われれます。桜の時期を過ぎると、気温が高くなり雑菌に対して特に注意が必要となります。

植菌時期が桜の咲く時期より多少遅れても、雑菌対策等管理をこまめに行うことにより翌秋の発生が期待できますので、作業をあきらめて原木を薪などにせず植菌を実施していただきたいと思えます。



写真-1 雑菌が少ない時に植菌する

## 三 仮伏せ期間の調整

仮伏せは、「植菌後の原木内のシイタケ菌を寒さや乾燥から守る」ことを目的に、植菌済みの原木を積み上げたり、立てたりして被覆

資材で覆い菌の活着を早めるための作業です。植菌から仮伏せまでは一連の作業の流れで行うことができますが、以後行う本伏せは田植えなどの農作業と重なることもあるため、仮伏せ状態のまま放置される場合があります。仮伏せ時には、保温・保湿には十分な状態であっても、仮伏せを長く続けることは、気温や湿度が高くなっていることから防寒着を春先から梅雨時まで着ているようなものです。早めに被覆資材を除去して通風を良くするとともに、速やかに本伏せして蒸れて雑菌を繁殖させないようにしてください。

本伏せが遅れるような時の緊急避難的な対策としては、仮伏せ時の密着させた棒積みから通風を良くした疎な井桁積みへ組み替え、日除け以外の資材を除去します。

なお、入梅直前は、仮伏せから本伏せに移行する時期ですが、この時期の植菌後は「仮伏せ作業」は行いません。仮伏せを行った場合には通気が悪くなり日中に気温が上昇するため、蒸れて雑菌が付着しやすくなります。植菌時期が遅くなった場合には、植菌直後に本伏せします。



写真-2 仮伏せは寒い間にとどめる

## 四 発生期のホダ場での乾燥防止

発生期の水分管理は人工ホダ場の場合、防風用の資材で周囲を囲み散水施設も備えているため容易ですが、露地栽培の場合には著しく乾燥した天候が多くなり十分な注意が必要です。ホダ場やホダ木を乾燥させないために防風ネット、散水、被覆資材の活用が必要になります。これらの資材等の準備が不十分な場合に発生期を迎えてしまいそうな場合には応急的な対策として、ホダ木をできるだけ低く伏せて水分ができるだけ逃げないようにします。特にホダ木上部からのシイタケの発生量が著しく少ない場合には、ホダ場が乾燥していることが考えられますので、可能な限り低く伏せてください。なお、低く伏せた場合には、シイタケの柄が立ち袋詰めが面倒

になりますので、できるだけ資材を活用して形の良いシイタケを採取してください。

### 五 シイタケの集中発生

発生期間中の天候が温暖で降雨続きの場合、一斉に発生が始まり、水分を含んだきのこはすぐに大きくなります。採取する場合、雨子状態であるために重くて傷みやすく、加えて乾燥作業には日和子の倍近くの時間を要するため燃料代がかさみます。仕上がった乾シイタケはバレルなどが多くなります。

集中発生したホダ場では、直接降雨にあたらぬ水分の少ない形の良いものなどを選んで採取することで、時間的・燃料的な損失を少なくすることができます。

採取したシイタケは速やかに乾燥作業を行わないと次第に品質が低下しますので、気温にもよりますが良品以外のものは少しの間ホダ木に残しておくことができます。

一般に集中発生時は、手っ取り早くスライスや生出荷することをお考えるため供給過剰となります。このような時には九州や静岡県など品柄の情報を得ながら品薄なものを目標に採取・乾燥することが販売時には有利になると考えられ



写真-3 良品を優先的に採取する

ます。

人件費や燃料代を考えずに発生した全てのシイタケを採取・乾燥した人より、水分が少なく形の良いものだけを採取・乾燥した人の方が結果的に収入向上につながった例もあります。

### 六 乾燥機の収容能力超過

収穫がピークを迎えると乾燥機が満杯になることがあります。事前に乾燥機に入りきらぬことが予想できるならば、前述五のように良品を先採り・乾燥します。

全て採取した後に収容能力超過

に気づいた場合には、水分が少ない良品から乾燥を開始し、傘と柄の付け根の部分の仕上げ乾燥直前に乾燥を中止して一度袋詰めします。同様の乾燥を繰り返し、最後にそれらの仕上げ乾燥を行います。傘と柄の付け根部分は、乾燥に最も時間を要するため、そこに水分を残した状態で乾燥を中止すると、水分が傘や柄に移行して水分が散らばり後の仕上げ乾燥が行いやすくなります。



柄の付け根部分は後で乾燥する

写真-4 仕上げる前までの乾燥

なお、短時間で乾燥処理する場合にはスライスにします。手切りは厚さが不均一のため、機械切りより安値になってしまいますので注意してください。



写真-5 スライスは機械で均一に切る

### 七 おわりに

春のシイタケ関係の作業は、他の農作業と重複することが多くなるために遅れがちになりますが、適期適作業を心がけましょう。

また、収穫直前までには、使用する機械類や乾燥機の煙突（鳥の巣）の点検を忘れずにおこなってください。県外主要産地の発生状況と品柄に関する情報収集、労働力の確認、乾燥機の収容能力などを考慮して今春の発生期の作業方針を決めてはいかがでしょうか。